

Classics of Philosophy in Japan 1

田辺 元

懺悔道としての哲学



CHISOKUDŌ

PUBLISHED BY Chisokudō Publications
Nagoya, Japan
<http://ChisokudoPublications.com>

SERIES Classics of Philosophy in Japan, 1
© Chisokudō Publications, 2016

COVER DESIGN Claudio Bado

ISBN 979-8376980965

JAPANESE TEXT

The interlinear numbers in the text refer to the pagination in the original edition of Tanabe Hajime's *Complete Works*:

「懺悔道としての哲学」『田辺元全集』筑摩書房、1963年、第九卷、pp. 1-269.

TRANSLATIONS

Marginal annotations on even-numbered pages of the text refer to the pagination of the following translations of the work:

- E¹ English translation. *Philosophy as Metanoetics*, trans. by Takeuchi Yoshinori, et al. Berkeley: University of California Press, 1986.
- E² 2nd, revised English translation. *Philosophy as Metanoetics*, trans. by Takeuchi Yoshinori, et al. Nagoya: Chisokudō Publications, 2016.
- I Italian translation. *Filosofia come metanoetica*, trans. by Tiziano Tosolini. Mimesis: Milano–Udine, 2011.
- K Korean translation. 『참회도의철학 : 정토진종과 타력철학의길』, trans. by Kim Seung Chul. Seoul: Dong-yeon Press, 2016.
- S Spanish translation. *Filosofía como metanoética*, trans. by Rebeca Maldonado et al. Barcelona: Herder, 2014.

目次

懺悔道としての哲学

序	3
第一章 懺悔道の哲学的意義	17
第二章 懺悔道の論理としての絶対批判	46
第三章 絶対批判と歴史性との聯関	64
第四章 懺悔道と自由論との比較	117
第五章 懺悔道の絶対媒介性	148
第六章 親鸞の三願転入説と懺悔道の絶対還相観	185
第七章 親鸞の『教行信証』三心釈における懺悔道	209
第八章 懺悔道の展望としての宗教的社会観	236

懺悔道としての哲学

序

3
昨昭和十九年夏には我が国運いよいよ傾き国力益々蹙まりて、外敵の侵撃来襲日に急を告ぐるにもかかわらず、国政洪滞して当局の為す所全く状勢に副わず、必要な革新を断行して狂瀾を既倒に返す力無き政府は、かえつてその責任を蔽わんがために、真実を隠して国民に知らしめず、その政策施設に対する一切の批評を封じ、ただ政府を謳歌してその宣伝を勤むる者を除き、あらゆる言論を禁止し、右翼以外の思想に対する抑圧苛酷を極め、我々国民は極度に緊迫せる生活の中に不安を懷き国家の前途を憂うるも、これを訴うるに所無く告ぐるに人無き苦悩の状態に置かれた。まず何よりも、内閣の更送を求むる情は期せずして国民一般の胸裏に漲れるにもかかわらず、この民意を発表する途は全く杜絶されて居たのである。私もちろんなこのような一般国民的苦悩を管めると同時に、更に思想に携わる者として特別の悩を経験しなければならなかつた。それは一方において、いやしくも哲学を学び思想を以て国に報すべき身である以上は、たとい現在の政府の忌諱に觸るるも、なお国家の思想学問に関する政策に対しては直言以て政府を反省せしむべきではないか、今一日の猶予を許さない危険の時に際し、国政の釐革に關していやしくも言うべきものあるならば、ただ沈黙するのは国家に対する不忠実ではないか、という念慮と、他方においては、平時ならば当然なるかかると行動も、戦時敵前に国内思想の分裂を暴露する恐ある以上は、許さるべきでないという自制との間に挟まれて、いずれにも決することができない苦しみであった。しかしてこの板挟みの境地にあつて更に私の強く悩まされたのは、この程度の困難を迷う所なく処理することができないようでは、私は哲学に従

事する資格は無い、いわんや哲学教師として人を導くことなど思も寄らない、当に私は哲学を廃し哲学教師を辞任すべきではないか、という疑であった。私はこのような幾重にも重なる内外の苦に悩まされて日を過し、その極私はもはや氣根が尽き果てる思をなし、哲学の如き高い仕事は、天稟の卑い私のような者の為すべき所でない、という絶望に陥らざるを得なかった。しかるに何という不可思議であろうか。この絶体絶命の境地に落込んで自らを放棄した私の懺悔は、意外にも私を向け変え、今や他を導き他を正すなどという事は全く私にとって問題とはならぬ、自己の正しき行動さえも自由に任せぬ私なのであるから、私はまずあくまで懺悔して素直に私自身を直視し、外一切に向う眼を内に転じて、自己の無力不自由を徹底的に見極めよう、これこそ今までの哲学に代る私の仕事ではないか、という新しき決意に達せしめたのである。もはや哲学する能力も資格もない私であるから、それが哲学であるかどうかは問題ではない、ただ当面為すべく私に課せられた思想的仕事である以上は、私の力の許す限りそれをしようという決心が、かえってそこに哲学ならぬ哲学を懺悔の自覚として私に課するに至ったのである。今や私自身が哲学するのではない、懺悔が哲学するのである。懺悔が私の自覚を懺悔の行そのものにおいて課するのである。それが従来の哲学の否定せられた跡に、新しく生れて来た、哲学ならぬ哲学である。哲学ならぬ哲学という訳は、哲学が一たび絶望的に抛棄せられその死滅した跡へ代に現れて、しかも哲学の目的とした窮極の思索、徹底的自覚という要求を満たさんとするものだからである。それはもちろん無力一たび自らを抛棄てた私の、自力を以て為す所の哲学ではない。私を私の懺悔において向け変え、この無力の自覚に新しく再出発せしめた他力が、私をしてそれを行せしめるのである。懺悔とは、私の為せる所の過てるを悔い、その悪の償い難き罪を身に負いて悩み、自らの無力不能を慚じ、絶望的に自らを抛棄てることを意味する。それは私を否定する行であるから、私の行にして同時に私の行ではない。私ならぬ他者がこれを催起するのである。しかしその他者がかえって私を転換的に向け変え、従来と異なる新しき道に再出

発せしめるのである。従って懺悔は他力の行に外ならぬ。私を促して私に哲学への再出発をなさしめる他力は、私の懺悔においてはたらく。私は他力の催起に身を任せて懺悔を行じ、他力に信頼して自らの転換復活を証せしめられる。かくてこの懺悔の行信証が、すなわち復活せしめられた私の哲学となる。これは懺悔道 *Meanoetik* というべきものであつて、正に他力哲学である。このようにして一たび哲学に死んだ私は、再び懺悔道において哲学に復活せしめられた。但し、復活というも、それは一度絶望抛棄せられた哲学を再び取上げてその道に復活せしめられるという意味ではない。かかる否定もなく転換もなき自同反復はあり得ないのである。精神においてははいわゆる反復は超越であり、復活は新生でなければならぬ。もはや自ら生きるのではなく、生でも死でもない絶対的なるものから超越的に私は生かされて生きるのである。絶対は斯様に相対の否定であり転換であるから絶対無と規定せられる。その無が私を復活せしめるにより、私には無即愛として体験せられるのである。あるいは絶対否定の大非即大悲として証せられるといつてもよい。私はかくして懺悔の行信において絶対の他力に依る転換復活を証する。懺悔道が懺悔の行信証として他力哲学の途となることもはや疑が無い。もちろん有限不完全なる私の行う懺悔である以上は、それが不純であり不真実であることも免れざる所であつて、そのために自らは懺悔を行じたつもりでも、真に復活が証せられない場合があり、また一たび復活しても懺悔から遊離して再自力に帰り、自賢自負して一度達せる所に止住するならば、また現実と背馳し矛盾して、再び絶体絶命の窮地に陥ることを免れない。ただ不断の懺悔のみ不断の復活を信証せしめる。この循環を現実の進展と相即して行証せしむることにおいて、懺悔はその無限性永遠性を現わし、絶対即相対なることを証する。それは原理的には正に歴史の形成に外ならぬ。懺悔道は内容的具体的にいえば、徹底的歴史主義であつて、不断の懺悔が歴史の循環的發展を原理附けるのである。

このような懺悔における転換復活は、正に親鸞がその他力法門において浄土真宗を建立した径路に外ならない。私は親鸞

が仏教において進んだ途を、偶然にも哲学において踏まめられることになったのである。そこでこれに想到すると同時に、私は彼の教行信証を懺悔道として読解することに力を注いだ。従来も私は全く親鸞に触れる所がないわけではなかった。特に歎異鈔や正像末和讃中の悲歎述懐などは、その懺悔の基調において私を動かすこと大なるものがあつたのである。親鸞の他力念仏門が易行道と標榜せらるるによつて動もすれば人に安易の感を懐かせ、人間が大悲の絶対転換においてそのままに救済せられるという超越的境地を、誤つて相対的自然の無道德的立場と混同し、その結果、教義が無慙の悪行亡状に対する弁護に利用せられるという如き弊害あるにもかかわらず、親鸞の信仰が全く悲痛なる懺悔を基調とするものなることは、従来といえども私の固く信ずる所であつた。しかし教行信証が懺悔道といふべきものであることには、私は全く想到らなかつたのである。事実懺悔については、非常に高い調子でこれを讚歎する以外、内容的には僅に三品懺悔の分類の如きものを説くに止まり、教行信証の中心として懺悔の概念を見出すことはない。もつとも、曾我量深氏の如きすぐれた宗門学者にして懺悔の基調を捉え、これに重きを置いた人はあるにはある。私は氏の解釈に啓発せられたこと多大であり、深くこれを感謝するものである。しかし教行信証を仏教の懺悔道的展開として領解するという如きことは、一般の真宗解釈として認められて居るとはいえない。少なくとも従来私は、かかる角度からこれに触れては居なかつたのである。否、生来自力主義に傾いた私は、親鸞の他力念仏門に親しみを感ずるよりも、より多く禪に親しみ、僧堂の修業をしたことはないけれども、語録に親近することは久しきに及んで居る。天資庸劣未だその門内を窺うことさえできないのは真に慚ずかしい限りであるが、しかしそれでも真宗よりは自己に近いことを感じないわけにゆかなかつた。教行信証はその程度に私に対し親しみ薄きものであつたのである。かつて教室で私と共にヘーゲルを読み、彼に依つて養われた思索力をもつて立派な『教行信証の哲学』を著した武内義範君の如き人があつて、私はこの書から教えられる所も少なくなかつたのであるが、しかし教行信証の思想を

自らの哲学とする如きは、私には全く思も寄らない所であった。しかるに今や私は自ら懺悔道として哲学を他力的に踏み直す機会に、教行信証を精読して、始めてそれに対する理解の途を開かれたことを感じ、偉大なる先達として親鸞に対する感謝と仰慕とを新にせられるに至った。本書の第六章、第七章に解釈を試みた三願転入や三心釈などは、救済の構造を究明した宗教哲学的思想として殆ど無比ともいうべきものであると信ずる。私は今や親鸞の指導に信賴して懺悔道を推進せしめられるに至ったことを、他力の恩寵として感謝せずに居られぬ。しかも甚だ意外なことは、私がこのように他力信仰に對し眼が開かれると同時に、普通自力門としてそれに対蹠的とせられる禪に、従来よりもおお一步を近づけしめられた感があったことである。否、それどころではない。一見極めて縁遠い教理哲学の問題として久しく私の頭を悩ました無限集合論に對する態度などが、他力哲学の行信証によって新しい方向に決定せられようとする兆候を示したのである。歴史哲学が懺悔道に根柢附けられることは、懺悔道が内容的には徹底的歴史主義に外ならざることによって当然といわなければならぬ。かくて私は懺悔道が一見甚だ狭小なる偏局的立場なる如くに見えながら、実は広い展望を有するものなることを信ぜしめられ悦に充たされた。

あるいは懺悔などといえば、特異な現象であつて哲学に途を開く如き汎通性を有するものでない、という疑もあるであろうが、私は自己の懺悔道が広く社会性を帯びることを初から感じて居たので、社会連帯という見地からいえば、我々は誰でも不断に懺悔を行じないわけにゆかないことを信ずるのである。私のこの度の懺悔はさきに述べた如く、悲觀的なる国家状態における私の哲学思想の行詰まりに促されて起つたものではあるが、その絶体絶命の窘窮はただ私一個の思想者としての責任に関する悩みにのみ因由するのではない。私はこの数年来軍部を始め支配階級が国民を愚にして理性を抑え、道理を無視して極度に非合理なる政策を強行し、その極國際道義に背馳して国の信義を失墜せしめたことに對し、極度に憤慨を感じる

こともちろんであつたのではあるが、しかしその責任は単にそれを敢てした特殊の部面にのみ帰属するのではなく、窮極においてはこれを抑え得なかつた国民の全部が負うべき連帯責任であり、就中政治と思想とにおける指導層が、直接当事者に次いで最も大なる責任を負うべきものなることを痛感して居たのである。いわゆる知識人の傍観者の態度というものが決して承認せらるべきものでない、我々は畢竟連帯的なのであるという信念は、強く私を支配した。この連帯観に立脚するならば、懺悔道は何人にとつても何時においても必然に要求せられるものなること疑問の余地はないはずである。懺悔道を哲学とすることは、倫理を哲学の通路とすると同じく、一般性を要求し得るのである。しかも更に懺悔道が親鸞の教行信証に指導せられるに及び、それは後者の還相廻向なる深き思想に導かれて、特異の宗教的社会思想を示唆せられる。それはキリスト教的隣人愛の平等と異なる、先後の秩序ある平等としての兄弟性に外ならない。今日民主主義の自由は不平等を将来し、社会主義の平等は自由を阻礙すること隠れもない。自由平等は決して与えられた安易な統一ではなく、困難なる課題たること明白である。その課題を解くには、普通に自由、平等、友愛と並列せられる友愛が、原の意味たる兄弟性の具体相において、自由と平等とを媒介するものではないか。大乘仏教の菩薩道を他力信仰の上から対自化した真宗の還相観は、具体的なる社会構造論を示唆して、新しき歴史哲学に展望を開く。果してしからは懺悔道は決して思想の不生産的空転ではないといわねばならぬ。

かくて私は去年秋になると共に、真剣に懺悔道を哲学として展開することを試みた。懺悔道はその成立上懺悔道的に展開せられなければならない。それは懺悔を対象とする「懺悔の哲学」ではないからである。既成の哲学的方法を提げて懺悔の解釈をする現象学ないし生哲学の如きものではなく、あらゆる哲学の立場と方法とが無効として掃蕩せられるその廢墟に復興せられるのが懺悔道である。かのデカルトの方法的懷疑よりも一層徹底せる哲学的掃蕩の方法であり、しかもそれは一た

び死して復活せしめられた哲学であるから、それ自身既成哲学として取扱われることはできるものではない。それは正に死して蘇る転換を行じ行ぜしめられる行証なのである。自ら懺悔を行わずることなくして懺悔を語るのは懺悔道ではない。ただ他力行として自らこれを行信する者のみこれを証し自覚することができる。私はかかる意味において懺悔道を行証し懺悔の自覚を深めた。その間に私が懺悔道の汎通なる論理として発見したものは、私が絶対批判と呼ぶ所のものである。それは自力のなる理性の哲学が、現実との対決において避け難き二律背反に陥り、カントの理性批判が示した、知識を制限して信仰の立場に立つ、という如き自力の処理を容さないような絶対絶命の窮地において、支離滅裂、七花八裂の絶対の分裂に、進んで身を任すことを意味する。理性批判の主たる理性は、批判を通じて自らを保全することができるものではなく、思想の絶対分裂に自ら全く引裂かれざるを得ないのである。この絶対分裂すなわち絶対批判であって、それは正に理性批判の徹底に外ならない。しかもその絶対の分裂矛盾が矛盾をも矛盾的に否定する所に、絶対の転換が行われ、哲学が哲学ならぬ哲学として超越的に復活せしめられるのが懺悔道であるから、その論理は絶対批判でなければならぬわけである。科学と倫理とにおける理性の批判は、その徹底の帰結として懺悔道に至る。カントの理性批判がヘーゲルの精神現象学に発展し、前者の弁証論が後者の弁証法に転換せられたのも実はこの途に外ならぬ。ただヘーゲルは理性の七花八裂が、依然として理性に統一せられ従って理性として復興せられ、理性はその無限の思惟において自らの死復活を概念に包みて自覚することができる。考えた。すなわち死して蘇るのはもはやもとの生ではなく、生でもない死でもない絶対の転換すなわち無の行であり、その自覚は主体的中心における行信証に止まることを忘れて、絶対矛盾の自己同一が行信証を超えて概念的に思惟せられ、無限の円環に統一せられると考えたのである。ここに彼の理性が依然アリストテレスの同一性論理の樊籠を破り切らなかつた点がある。しかしこれは実は弁証法の否定に外ならない。そこでは自己の行的転換の中心が解消せられて、客観的なる概念が

支配する。故にこれを裏返せば概念が実体となり絶対観念論が唯物論となるわけである。これ如何にするも客観化し物質化する能わざる主体的自己なるものが無いからである。それは自己の行的転換においてそれに媒介せらるべき通路のない非実存主義に外ならない。行的自己の無の自覚の代に、有の実体が登場するのは当然である。スピノザ主義を通じてヘーゲルがマルクスに転化した所以である。これに反し懺悔道はあくまで行の転換に大非即大悲を証し、大行に媒介せらるる自己の死復活の転換的統一を行証する立場である。それはこの他力の転換にまで批判を徹底したものであるから、正に¹⁰カントの理性批判を最後の帰結に導いたものであって、ヘーゲルが意図して達しなかつた絶対媒介の弁証法を、彼の如く理性の観念においてでなく行信において貫徹するものである。それがヘーゲルの理性主義に反対してカントの根原悪の思想を深く追究したシェリングの自由論に通ずる所があり、また同様にヘーゲルの知性に反対してあくまで自己の実存を実践的転換の中心として確保しようとしたキルケゴールの影響を受ける現代のハイデッガーの実存哲学に、呼応する所が少なくないのは当然でなければならぬ。しかも懺悔道は前者の思弁的構成に反対してあくまで絶対媒介の自覚的立場に立ち、後者の実存主義の自立的立場がキルケゴールの信仰より離れてニーチェの思想に共鳴するに反して、他力行信の立場に徹することにより絶対と自己との転換媒介を確保し、なお自己の相対が他の相対と媒介せらるるその媒介に、絶対が絶対媒介として現成することを自覚するによつて、自由論にも実存哲学にも共通なる限界と認められる所の個人主義を、社会的協同の立場に具体化する。その社会的協同体が前に述べた還相観念に指導せられて、従来私の唱え来つた「種の論理」に基く社会存在論に新しき根拠を与えることは、懺悔道が哲学として十分具体的なる展望を有することを私に確信せしめるに足りた。今や私は新しき安心を以て再び哲学へ帰ることができたのである。あたかもこの哲学への復活の思想内容を以て、私の京都大学在任中の最後の講義に充てることができるのは、かねて希望した内閣更迭が行われたにもかかわらず後継また無能徒為にして状勢改まる所な

く、国民の憂慮不安、窮乏災害日に甚だしくいよいよ悲観の濃厚なる中に、いささか自ら慰め自ら励ますに足るものがあつた。私は感謝と信頼とを以て懺悔道という題目の下に、十月講義を始め十二月にそれを終つたのである。その間京都哲学会公開講演会にも同じ題目を掲げて懺悔道の要旨を語つた。これが懺悔道としての哲学の由来である。

私は最後の講義の準備をしながら、今述べた絶対批判の論理を展開し、私の従来それに養われた西洋哲学に批判解体を施してこれを懺悔道的に再興發展せしめ、エックハルト、パスカル、ニーチェなどにも自己の立場から新しい解釈を加えて、従来透り得なかつた点を自分なりに通ることが出来る悦を感じた。更に教行信証の懺悔道的解釈には最も力を注いだこともちろんである。それらの結果を書綴つて幾つかの草稿を作り、その要領を一貫した講義に纏めて話したのである。三箇月の一学期はもとよりこの講義に対し短過ぎた。一学期でなく一学年をこれに充ててもなお足りなかつたであらう。しかし私の停年期日がこれを許さなかつたばかりでなく、平生から弱体の私は十一月から健康に故障を現わし、私は不自由な体を病床から教室に運んで帰宅すれば直ちに病床に横わることを余儀なくされた。この間にあつて、どうかして予定の講義だけは済ませたいというのが私の切なる願であつたので、十二月最後の講義を終つた時には全くホツとする思であつた。それ以来私はずつと病床に臥して年を越え冬を過したのである。その間学生諸君、卒業生諸君、友人諸君の私に注がれた好意は、全く言葉に尽すことができないものであつて、私はそれに対し如何に感謝しても感謝し足りない思がする。かくて本年二月初に退官した時には、私は二十五年に余る大学生活に顧みて、無力為す所もなく過ぎたことを慚ずると同時に、病弱の身を以てとにかくも任期を果たすことができた恵を天に向い人に対して感謝せずには居られなかつたのである。ただ私個人の事から国の運命にたゞび思を転ずれば、痛恨極まりなく悲哀限がない。内閣は再度更迭しても状勢は好転すること全然なく、本土侵害せられて惨禍は全く言語に絶するものであつた。しかしそれでも私は絶望せず、当面必要な問題の研究に注意を怠ら

なかつた。かくの如きは懺悔道として復活せしめられた哲学が、もはやその転換の動機となつた曩時の絶望を再び絶望に終らしめず、絶対に転換せられて無執無着なる立場に立つ結果であると私には信ぜられる。私はいよいよ懺悔道の、弱きが故の強さ、無力の謙虚なる自覚に徹するが故に他力の大悲に活かさるる恵、を感じないわけにゆかなかつた。ただ空襲の激化は、防空能力を欠く私如き者の都市に留まることを、国防の妨碍として警告せしむること類なるものがあるので、遂に七月下旬私は京都を去つてこの地に移住することを決行したのである。無事にそれが果たしたのは固より人々の好意に依る。しかるにこの地の静閑爽涼は故障依然たる私の氣力を引立て、以来二ヶ月余専心に筆を執つて、昨秋講義の準備中作つた覚書を一篇の論文に書改めることを可能にしたのである。それがこの小著の内容に外ならない。その発表については初は私に確たる予定もなく、ただ従来の関係上雑誌『哲学研究』に掲載しようかと考えて居た。ところが八月半の大変が起り、敗戦国として無条件降伏の悲境に我国は顛落したのである。悲痛言う所を知らないのは、もとより私一人ではない。国民の全体である。しかも国民として事ここに至れる由来を顧みるとき、ただ懺悔より外になす所を知らないということも、眞実でなければならぬ。今に至つて考えると、私の懺悔道は一年前に、国家国民に対し讖をなしたという不思議な廻合せになつてしまつた。私はこれと思うとき痛恨無き思がする。固より私は、今日自己の責任を回避せんがために国民に総懺悔を勧むる指導層の無恥厚顔を憎む者である。連帯責任の立場に立つとき、懺悔はまず自ら行ぜずして人に勧めらるべきものではない。しかし今この悲運に陥つて見れば、我国が全体として懺悔しなければならぬことは、瞭々として火を見るよりも明であるといわなければならぬ。国民の連帯責任を信ずる私にとつては、文字通りの総懺悔は当然の事である。私は懺悔道が私一人の道でなくして我国民の哲学する道であることを思わざるを得ない。ところで懺悔は、親鸞において悲痛を含意し慚愧を伴う如く、西洋語において *penitencia* は本来苦痛を意味するのであつて、苦痛なき懺悔はあり得ない。しかし懺悔の核心は転

換にある。苦痛が歓喜に転じ、慚愧が感謝に換ることがその本質である。我国が懺悔の外に今行くべき途が無いということは、単なる絶望を意味せずして、同時に復活への轉換の希望を意味する。斯様に懺悔が他力轉換の行であること私の信証する如きものであるとするならば、私はそれを国民諸君に告げることを禁ずることができない。懺悔道を以て私一人の哲学とするのみならず、諸君の哲学としてそれを提供することは、私の報恩でなければならぬ。かく考えて私はでき得る限り速にこの小著を一巻として世に公にする決心をしたのである。もちろん私は懺悔が我国民の行くべき途であることを唱えても、決して懺悔道としての哲学を他に強ゆるものではない。ただ現在の日本人として哲学を求むる国民諸君に、これをその自由なる取捨に向つて提供するの私のやむにやまれざる所たるのである。今日敗戦の悲運と共に多年我々を抑圧した思想の重圧が、外国の力によつて取除かれ、思想の自由が国民轉向の目標として掲げられて居る。しかして国家の強制から解放せられた文化の建設が、我国の再建の方途としてしきりに提唱せられて居ることは現に我々の見る如くである。知識人が文化主義を標榜して自由活動に明朗なる気分を漂わせて居ることは、實際敗戦国の一見甚だ不思議なる現象であるといわざるを得ぬ。私といえどもまたこの気分の誘惑を感じないわけではない。それ程にも我々の多年蒙つた重圧は大きかったのである。しかしそれだからといって、自ら犠牲を払つて圧迫を排除け自由を贏ち取つたのでなくして、無条件降伏を余儀なくされた戦敗国として自由主義を強制せられ文化主義を課せられるのでは、たとい従来の抑圧勢力が取除かれても積極的に新しく文化を創造する気力があるであろうか。仮に新しき文化の花が咲かされるとしても、それは強い根のない、一見美しくはあつても弱々しい温室咲の花に過ぎないのではあるまいか。真に生命ある文化は文化主義の産物ではない、文化主義はかえつて文化頹廢の産物である、という一見逆説と思われる所に眞実はある。とにかく私は一般に文化主義の抽象性に嫌らざるものであるが、別して今日の文化主義の前途には大なる希望を懐くことができない。これに満足して明朗なる気分を漂わす如き

傍觀者的態度は、全く國民の連帶性を知らざるものといわなければならぬ。現在食糧物資の欠乏と偏在、産業の停頓禁止と復員失業の矛盾、という如き社会問題の逼迫は、国家再建の如何に困難なるかを思わしめる。もし一步を誤り一刻を忽せにするならば、亡国の悲運もまた避け難き恐が十分にある。我々は国を挙げて懺悔に道を新しくし、旧来の制度組織に執わるることなく、如何なる革新といえども国家再建の途に現在絶対¹⁴に必然なるものとして促さるるならば、相協力してこれを遂行するの¹⁴なければ国家の再興は期し難い。今日我国思想家の行くべき途は、文化主義の宣伝よりも前に懺悔道の提唱でなければならぬ。旧約の預言者エレミヤこそ、我々の途を示すものではないか。しかし更に¹⁴真実をいえば、我国に国家主義の清算を課する聯合國間にも、民主主義と社会主義との協調は決して解決せられた事実ではなく、むしろ今後¹⁴に課せられた問題たるのであつて、それが満足の解決に達せざる限り、多くの矛盾が内外からこれらの国々を悩ますことも避け難い。民主主義国も社会主義国もまた、それぞれに懺悔すべきものをもつのである。もし我国が復興の世界歴史的使命を担うものありとすれば、この両主義のいずれでもなくして、しかも両者に自由に出入する第三の道を発見し実践するにあると考うべきではないか。果してしからば懺悔道はひとり我國民の哲学たるのみならず、人類の哲学でもあるのでなければならぬ。人類は総に懺悔を行じて、争鬪の因たる我性の肯定主張を絶対無の媒介に転じ、宥和協力して解脱救済へ相互を推進する絶対平和において、兄弟愛の歡喜を競い高める生活にこそ、存在の意味を見出すべきではないか。世界歴史の転換期たる現代の哲学は、特に懺悔道であるべき理由をもつといつても、それは必ずしも我田引水ではあるまい。固より私はこれを以て世界を指導しようなどと考えるものではない。懺悔道はかかる考を許さない。「親鸞は弟子一人ももたず」という同行意識こそ、懺悔道の非特権者の平等主義である。しかも更に歎異鈔には、「このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御計なり」といつてある。私もまた懺悔道について同じ事をいう外ない。かくの如き自由平等の精神こそ、懺悔道が

民衆の哲学たるべき所以であると信ぜられる。

この書の成ったについては、上に述ぶる如く、昨夏以来私を養護せられた諸君に対して、まず、衷心より深厚なる感謝の意を表さなければならぬ。私はこの書の存する限り諸君の好意を忘れることがないのである。なお脆弱の一身を多年私の研究生活に捧げる妻に対して、ここに慰勞の言葉を記すことを容されたい。最後に私はこの非常に冗長なる序文を以て読者を累したことを謝する者である。

昭和二十年十月¹⁵

北軽井沢にて

著者